

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

先住民であることとミックスであること：  
オセアニアの先住民を中心に＜共同研究：  
ミックスをめぐる帰属と差異化の比較民族誌：  
オセアニアの先住民を中心に＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 由理子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010019">https://doi.org/10.15021/00010019</a>

# 先住民であることとミックスであること

## —オセアニアの先住民を中心に

山内 由理子

私が2000年代にシドニー郊外で大学院生としてオーストラリア先住民の調査を始めたころ、ヴェラ（仮名）という女性に会った。インタビューさせてもらおうと、彼女は先住民のルーツの他に「私の祖父はドイツ人で、もう片方の祖父はマオリ。私はこの2人についてもっと知りたい」と答え、私を驚かせた。フィールドに入る前に私は「非先住民のルーツを持っていても、先住民のルーツを持っている人は『先住民の側』に追いやられてきたのであって、自分を先住民だと思っている」と聞いていたからである。だが、自分の非先住民のルーツを語る先住民はヴェラだけではなかった。たとえば私の友人のジャネット（仮名）は自分のスコットランド側のルーツの証書を壁に飾り、私が「あなたは先住民だよ」と聞くと、「一部はね」と答えた。当時、私はこの「ミックス」に関しどう描くべきかわからず、博士論文でも先住民の人びとの日常が非先住民の人びとと混じりあっていると説き及ぶるとどまった。

私の現在のフィールドはオーストラリア北西部のブルームという町で、1880年代からオーストラリア先住民と日本人を含むアジア系労働者が交流してきた。ここの日本人移民の

子孫はほとんどが先住民とのミックスである。彼らのアイデンティティを聞くと、「ミックス」「Japanese-Aboriginal Australian」などと答えてくる。そのライフヒストリーは家族による違いが非常に大きく、その分析に私は頭を悩ませていた。しかし、フィールドの町から目を広域に転じてみると、彼らが共有するのはブルームへのアジア人労働者流入の歴史であり、それはオセアニア全土への植民地化に伴う人の流れの一環であったことに気づく。ミックスの存在は「めずらしいこと」ではなく、「普通の」ことのはずなのである。では、それについて考えることがなぜ、こう「難しく」あり続けたのだろうか。

### オセアニアにおけるミックスの人びと—歴史的・学問的背景

本共同研究はオセアニアでの先住民と非先住民のミックスの人びとが焦点であり、ミックスの人びとに関する研究と先住民に関する研究が関わる。現在の社会科学では、エスニシティ、人種、民族などのカテゴリーの社会的構築性が指摘されて久しいが、「ミックス」の人びと自身にとり、これらのカ

テゴリーは生きる「現実」であり続けてきた。このような問題意識より、1980年代にミックス・レイス・スタディーズという学問分野が確立し、両アメリカ大陸やイギリスを中心に発展してきた。ミックスの人びとの経験は、社会的、歴史的、政治的コンテクストに影響され、その在り方は当該社会の力関係、移民、征服、植民地化などのパターンを反映する。たとえば、アメリカ合衆国で「ミックス」として注目されてきたのはアフリカ系アメリカ人（黒人）とヨーロッパ系アメリカ人（白人）のミックスであり、それはこの国での奴隷制の歴史の「重み」を表している。

では、オセアニアでの「重み」を持った境界とは何であろうか。オセアニアの社会形成の歴史で決定的なのはやはり植民地化であり、その根幹である



ブルームのタウンビーチの鳥居。日本人移民が1880年代から1960年代まで真珠貝採取業の契約労働者として流入したブルームでは、その歴史を記念してさまざまなモニュメントが見られる。写真はブルームの住人がよく遊びに訪れるタウンビーチに市役所が建てた鳥居である。(2014年、西オーストラリア州ブルーム、筆者撮影)

### 山内 由理子（やまのうち ゆりこ）

東京外国語大学総合国際学研究院准教授。専門は文化人類学、オーストラリア先住民研究。編著書に『オーストラリア先住民と日本—先住民学、交流、表象』（御茶の水書房 2014年）、論文に Japanese Ancestors, Non-Japanese Family, and Community: Ethnic Identification of Japanese Descendants in Broome, Western Australia. *Coolabah* 24&25 (2018) などがある。

先住民と非先住民の境界であろう。そこに関わるミックスの人びとは、植民地当局により先住民と非先住民の二極間のどこかに位置付けられ、管理されてきた。

この境界は脱植民地化後もオセアニアへのまなざしの基盤を形成し、オーストラリアやニュージーランドのような入植社会国家では、それはとくに顕著である。たとえばオーストラリアでは先住民と非先住民のミックスの人びとはまず、先住民の「血の割合」により分類され、時には「盗まれた世代」のような強烈な同化政策の対象となった。1980年代には先住民の定義が「出自、自認、コミュニティからの認知」の3点システムに変わり、先住民のルーツを持てば「先住民」として十全な主張が可能となったが、その一方で先住民、非先住民双方のルーツを同時に主張することは現在でも簡単ではない。オーストラリアでは先住民の権利回復も進むが、この動きは先住民側の戦略的本質主義の利用とも相まって、先住民以外のルーツの主張を抑圧する側に動き、皮肉なことに植民地主義的な先住民と非先住民の境界線の維持・強化に貢献してしまっている (Carlson 2016)。

先住民が独立したオセアニア島しょ部でも植民地化の影響は色濃い。先住民と非先住民のミックスの人びとは植民地時代にはさまざまな形で管理された。たとえば第一次大戦後、ドイツ領だったサモアを委任統治領として受け継ぎ統治したニュージーランドは、白人（外国人）と先住民を分断して統治するという方法をとった。数多いミックスの人びと（アフアカシ）の多くは無国籍であり、血と生活様式を複雑に組み合わせさせた仕組みで白人に、そして残りは先住民に分けられた。独立に際しては逆に、白人と先住民の分断を解消し1つの民族を作り出すために、アフアカシのサモア化は重要な課題となった。

その一方で、先住民側の文化・社会・政治的論理もミックスの人びとの経験に影響を与えている。たとえば、ハワイでは、政府の「血の割合」システムにより「先住民」から排除される人びとが、ハワイ的系譜のシステムでは親族として受け入れられる (Kauanui 2008)。ポーンペイ島（ミクロネシア連邦）では、ポーンペイ人女性とヨーロッパ系の捕鯨船の男性船長とのあいだに生まれた子どもを起点とする親族グループが形成されている。先住民側の論理はより柔軟にミックスの人びとを包摂する傾向があるが、それは同時にそれに対応して変容してきたものでもある。このような絡み合いの

上にミックスの人びとの経験は存在してきた。脱植民地化が叫ばれて久しい現在の世界では、その存在と経験の意味もさらに変化し続けるかもしれない。

## ミックスの人びとの語りかけるもの

このような状況の中で、先住民と非先住民のミックスの人びとについて研究する意味を考えてみたい。ヴェアやジャネット、ブルームの人びとは非先住民側を含めた自分たちのルーツを主張する。それが示すのは、植民地主義的管理の下に隠された人の交流の歴史の承認である。それはオーストラリア先住民の歴史であり、非主流のヨーロッパ系入植者やニュージーランドの先住民、アジア系労働者の歴史である。ミックスの人びとの問題は、これらを捨象して成立してきた植民地支配、先住民性、エスニシティ、国民国家、アイデンティティなど人を「分類」するさまざまな仕組みとその前提に関わってくるのだ。本研究ではオセアニア各地での多様な分類のコンセプトをミックスの人びとの経験を起点に問い直してゆくが、その根幹には近代西洋的なカテゴリー的思考そのものへの問いが内在している。そのような意味で本研究はより大きな研究への一歩とも位置付けられる。

これは同時に、現代世界の放置できない潮流を反映している。この共同研究の基軸であるミックス・レイス・スタディーズも先住民研究の近年の動きも、当事者が牽引してきた。先住民研究では近年先住民である学者が台頭し、なかには積極的にミックスであることを主張する人びともいる。ミックス・レイス・スタディーズでは、アメリカ合衆国で当事者の活動の結果、センサスのカテゴリーが変更された。双方の動きが示すのは、既存の学問の枠組みや議論の不十分性である。文化人類学の根幹の1つがフィールドの人びとの声を聞く、ということであったとしたら、この動きはこれまでの我々自身への警鐘でもある。この共同研究はこの警鐘に応答を試みるものであるが同時に、良い意味でそれに「纏わりつかれ」続けるものでありたいと思う。

### 引用文献

- Carlson, B. 2016 *The Politics of Identity: Who Counts as Aboriginal Today?* Canberra: Aboriginal Studies Press.  
Kauanui, J. K. 2008 *Hawaiian Blood: Colonialism and the Politics of Sovereignty and Indigeneity*. Durham: Duke University Press.